

**【主題】** 小規模校での複式学級経営・少人数学習指導を強みに変える学校づくり

**【副題】** 個別最適な学びを生かした児童主体の授業改善と地域と連携した体験学習の推進

**【学校・団体名】** 福井県福井市越廼小学校

**【役職名・氏名】** 校長 宇野 泰裕

## I はじめに

本校は福井市西部に位置し、冬には県花越前水仙の咲き誇る海岸段丘上に立地する。校舎の全ての教室から四季折々の日本海の景色が眺められ、豊かな自然と水産業を生業とした歴史民俗と伝統文化が息づく中で、子ども達は素直に、伸びやかに育っている。

その一方で旧越廼村が平成 17 年に福井市と合併して 20 年余りが経過し、人口は最盛期の 4 分の 1、1000 人を辛うじて維持する中で、本校も令和 3 年度在籍児童数は 21 名であり児童数減少により、全学年複式学級としての教育活動を進めざるを得ない状況である。児童数減少により、複式学級での学校・学級経営に対して多様な学び合いの機会減少や保育園からの人間関係の固定化など、保護者の中には小規模校での教育活動に消極的な見方をする場合も多い。そのため、市内中・大規模小学校への転出や校区外中学校への入学等も一定数見られ、そのことが学校規模適正化による統廃合への議論にも繋がっている。

## II 研究の概要

### 1 研究のねらい

本校では平成 26 年度より「意欲的に学ぶ授業づくり」をテーマとして研究を進めてきた。すなわち、児童一人一人の個性を生かし、個に応じたきめ細かい指導ができるといった少人数のよさを生かして学習リーダーを中心としたガイド学習を進め、児童同士が関わり合う授業展開を工夫することで、主体的に学び合おうとする意欲を引き出すことを授業研究のねらいとしてきた。特に、児童一人一人の言動から思考の流れを見取りながら、主体的に思考する姿を、どのような学習課題や発問で引き出すのか、その上でどのような学習活動を展開していくのかに焦点を当て、児童が主体的に思考するための場設定の工夫を意識しながら授業づくりをしてきた。しかし、児童が主体となって話し合い活動を進めていく力の育成には時間が必要で、話し合い活動を通して課題を解決していただく力はまだまだ不十分であった。そして、自分の考えを伝えら

れるだけの表現力も十分ではなく、論理的に自分の考えを伝えられる表現力の育成も継続した課題といえる。以上のことをふまえ、研究主題は「意欲的に学び合う児童の育成」を継続し、取組を進めてきた。

本校はすべての学級が少人数ゆえの複式学級での授業を行っており、教師の指導のもとで練り合う時間が十分にとれなかったり、意見の広がりや欠けたりといった授業づくりでの課題も見られる。特に、間接指導時には学習リーダーを中心に児童だけで学習を進めなければならず、その活動時間こそが児童が主体的に学習に取り組む絶好の機会ととらえ、学習活動展開の改善と工夫を実践研究してきた。

## 2 実践について

### (1) 令和 3 年度の主な取組

#### ① 児童主体の授業改善と学習展開の工夫

授業実践にあたっては、各教科単元を通してつけたい力を明確にし、学習終了時点でどのようなことが理解、あるいは達成できるようになるのかを意識して単元を貫く課題を設定した単元構想を練ることから始めた。その上で導入時は、まず生活経験に基づくみんなで考えることに必然性のある学習課題の設定を工夫した。授業者がつけない間接指導の時間で課題解決のための自分の考えをノートにまとめ、そこに自分なりの表現で相手にわかりやすく、伝えられるような理由や根拠も合わせて考えていくように指導してきた。その際に当番制で学習リーダーとなった児童が計時した上で、話し合いの進行役も務めていった。順番に発表していく中で、時には質問や意見を返したり、全体でどの考えが一番よいのかを絞っていったりと学習者である児童自らが学習を進めていけるように指導を積み重ねていった。直接指導の中では、まず出された子ども達の考えを子ども達自身が授業者に整理して伝え、それを受けてさらに思考を揺らし、問い直しをすることで自らの考えを深めていく展開とした。その思考の流れと変容を学習者自身が意識してまとめることをふり返りの場ととらえ、授業のねらいへの達成度と合わせ

て評価していく手立てとした。



【中学年 学習課題での自分の考えを友だちに説明】

学習者である児童が自らさまざまな考えを幅広く提示し、自由に意見をぶつけることができるようになるには、教室でまちがうことを恐れない、何を言っても大丈夫という心理的安定感が大切である。幸い入学以前より顔見知りの中で互いの性格を熟知し、その発言の裏にある言外の意味を推し量ることができる関係性があることは、学年・学級経営上、大変優位に働いている。しかし一方で、話さなくとも分かるという空気感がともすれば単語だけの発言、言葉足らずで伝わらない話しぶりにつながることもあり、常に相手意識を持ち、伝えたいように自分の言葉で順序よく、わかるまで話すことを指導の重点目標としてきた。それを授業者が一対一で指導するのではなく、学び合う仲間として児童の中から「よくわからないからもう一回言って」などと声を上げることで、話し方のスキルも学年を追うごとに高めてきた。その上で話すことから「分かっただけでいいから楽しい、うれしい」というように学習も進化し、学びそのものを進める原動力となった。



【低学年 少人数グループでの話し合いを先生に報告】

## ② ICT 機器活用による学習活動の多様化

複式学級での学習活動を進めていく中で今やなくてはならないものが GIGA スクール構想実現のため導入されたタブレットである。インターネットを活用して

の調査活動、実験・観察の記録としての画像、動画撮影、お互いの考えを持ち寄っての話し合いを始めるための意見提示と集約、そして学習のまとめとして成果物作成など、あらゆる場面で子ども達は、タブレットを文房具の一つとして使い熟している。その中で、学習リーダーがタブレット上で提示された学習を進めていくための学習ガイドから指示を出し、全員が学習の見通しを持って授業に臨むことで、教師による指示待ちによる学習指導が減り、自分達で学習を進めていくという意識も高まってきた。

また、タブレットを活用した効果としてオンラインでの意見交換や交流活動など、空間を越えて、時間の枠に制限されずに、共に学び合うことができることも大きい。海岸部に立地する本校と山間部に立地する大野市阪谷小とのそれぞれの市、地区を紹介し合う社会科学習、遠く岐阜県安八町立牧小学校との県を越えての交流活動など、コロナ禍にあつての新しい学習様式の中、新しい学びのあり方を感じさせる実践も試行することでその成果も蓄積されてきた。



【高学年 タブレットに自分の考えの変容のまとめ記録】

また、自らの作品や制作物を、時空を越えて昨年度の同学年の児童と比較することで、よりよいものへと修正していくとする動機付けや昨年度の自分よりもさらに成長した足跡を残し、自らの変容を振り返るといった学びへの意欲付けにも役立っている。

当初、タブレットを活用しての学習指導についてはその設定や活用方法などに教師も戸惑いがあったが、子ども達は「習うより慣れる」で次々と操作方法を習得し、友達同士で教え合うことで新しい学びの方法を積極的に身につけていくことができたことも大きな成果である。

## ③ 地域とつながり、共に学ぶ地域体験学習

本校では、「地域の中で地域を学び、その成果を地域に生かす」ことをねらいに総合的な学習を中心とした

地域体験学習を積極的に取り入れている。元々、旧越  
 廼村時代より村の小学校として地域を挙げて教育活動  
 に協力的であったが、コロナ禍にあってさまざまな行  
 事、体験活動に制約が生じた。しかし、そこは「地域  
 をよく知ることによって地域を見つめ直し、地域の良さを発信する」というねらいを明確にした上で、感染対策を  
 講じて可能な限り地域と連携して活動を進めた。5月  
 のわかめ採り・わかめ干し、そして10月の越前水仙球  
 根植付作業や11月の観光誘客を目的とした水仙配付  
 等、地域と協力して児童が取り組めたことは、越廼と  
 いう地域の魅力を自ら再発見することにもつながった。



【5月 低学年によるわかめ採りと全校でのわかめ干し】

また、それらの成果は、12月の学校公開の場「学び  
 フェスタ」でも、保護者の方に披露し、好評を得るこ  
 とができた。地区内の各種団体を集約した越廼地区イ  
 メージアップ推進協議会を中心に連絡調整や取組を実  
 践していったが、「子ども達から元気ももらい、地域を  
 活性化させたい」との思いを共にし、一体となって活動  
 できたことは学校の教育活動のねらいを共有するとい  
 う点でも成果は大きかったと考える。今年度は、旧越  
 廼村誕生70周年の記念すべき年にあたることもあり、  
 越廼地区内での秋季例祭で奉納される神楽や浦安舞等  
 を小中学生が共に参加して地域活性化を図ろうとする  
 活動に繋がっている。



【中学年 福井駅前での水仙配布でのステージ発表】

また越前水仙や越廼茶崎漁港での定置網漁など、子  
 ども達が調査探究活動で追究した越廼の良さについて  
 は、水仙交流として長らく交流のある岐阜県安八町牧  
 小学校や県へき地複式教育研究大会奥越大会開催の大  
 野市阪谷小学校とのオンライン交流でも地域の自慢と  
 して積極的に取り上げ、称賛を得ることで子ども達が  
 生活する越廼という地域への愛着を高めることにつな  
 がった。



【大野市阪谷小学校との遠隔でのオンライン交流授業】

## (2) 成果と課題

少人数での個に応じた個別指導の充実を図り、複  
 式学級での学習指導を教師に頼らず自ら主体的に  
 学びを得るための最適な活動時間ととらえながら  
 日々の授業実践を積み重ねてきた。複式学級ゆえに  
 担任は、2つの学年の教材研究を進めざるを得ず、  
 同時に授業を展開するなど負担は大きいですが、その分、  
 教師は学びにおいて確かな手応えを感じることが  
 でき、子ども達も確実に成長することを実感できた。  
 教員構成上、若手教員が多いため、相互に情報を共  
 有し、児童理解を進めることで複数教員が児童の状  
 況を確実に理解できていることでさらなる教育効  
 果を上げている。

その一方で個別最適な学びといわれている中で  
 どうしても教師が時間を掛け、個々にていねいに指  
 導に当たることが、結果として子ども自体の学ぶ姿  
 勢や意欲を削ぎ、学びが受動的になるようなことは  
 あってはならないと考える。思い切って子ども達に  
 話し合いや活動場面を委ね、「任せること=子ども  
 の力を信じること」が試されていることも実感した。  
 少人数だからこそ教師もゆとりを持って教育活動  
 にあたるために子どもにつけたい力は何かを明確  
 にして、見通しを持つての教育課程の編成や学校行  
 事の企画運営も重要である。

また、個別最適な学びの中でそれぞれの学習の成

果を確実に見取り、それをねらいに沿って正しく評価することで児童自身がさらに自らの学びを高めしていくことが必要になる。そのための手がかりとなるのが、タブレット内に残される記録写真や動画、授業での学習記録やふり返りなどの活用方法と自己評価に活かすことである。それらを教科単元の評価として活用するだけでなく、学年を越えて教科での縦の系列の中での学び方を学ぶ指針や足跡として、また時空を越えて過去の卒業生や他県の児童との比較検討、相互評価など、その活用方法は大きな可能性を秘めており、今後の課題として挙げられる。

タブレットのみならず ICT 機器の積極的活用の中でその先進的な取組や学習の成果を積極的に地域に発信していくことで、さらに学校の教育活動に関心をもってもらうことも心がけてきた。本校では、月複数回発行の校長作成の学校通信は地区内全戸配付、また教育活動の様子を発信する学校ホームページはほぼ毎日複数記事を更新している。将来的には双方向で本校の教育活動に対する意見を幅広くいただくことで、開かれた学校としてさらに信頼を高め、学校教育の充実へと活かしていきたい。

### (3) 今後の展望

今年度は、年度当初に校長が「小規模校の特性を強みに変える学校づくりナインマトリックス」を教職員に提示した。その中で研究主任や生徒指導主事、特別活動主任などそれぞれの校務分掌で、重点的に取り組むべき項目を考え、前例踏襲ではなくコロナ禍にあって新しい教育観を盛り込んだ積極的な挑戦を個人目標の中に盛り込むよう指示した。また、同様に「学びが楽しい授業創造のためのナインマトリックス」も提示して毎日の普段の授業を大切にしながら心理的安定感のある学年・学級経営の中で子どもが学びを実感できる授業改善を推進している。

実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

【小規模校の特性を強みに変える学校経営ナインマトリックス】

実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録	実践領域に特化した継続的な学習記録
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

### 【学びを実感できる授業創造のためのナインマトリックス】

今年度は、児童主体の授業改善、委員会や学校行事などの特別活動、そして児童自ら考え、行動していく生徒指導と「学校の主役は、そこに通う子ども達である」を全面に出して、さらに少人数での教育活動の充実を進めている。そのためには児童の学習状況や生活行動面での特性など一人一人の児童を全教職員が確実に理解し、適切な対応をすることで教育効果を上げていくことが求められる。その上で子どもの喜びを共に分かち合える教師もまたお互いに学び合い、高め合う集団であってほしいと願っている。

### III おわりに 小規模へき地・複式校の未来に向けて

昨年度、大野市阪谷小学校を会場に行われた県へき地複式教育研究大会奥越大会の公開授業研究協議会で県教委指導主事が、次のような講評を行った。

「今やへき地・複式学級を有する小規模校での教育実践は、個性重視、個別最適な学びの中で時代の最先端をいくものである」

まさに GIGA スクール構想による児童一人一台ずつのタブレット配置とオンラインでの新しい授業展開、そしてコロナ禍にあっての「学校における新しい生活様式」の中での学校での教育活動・行事の2つの大きな変化は、今までの学校教育のあり方を大きく変えようとしている。かつて産業も特産品も何もないといわれた過疎地区にあって、児童数減少に悩む小規模校といえれば前向きに評価されることはなかったかもしれない。しかし、新しい時代の急速な価値観変容の中でそれらを恐れることなく、むしろ絶好の好機と捉え、小規模校に勤務できていることを教師自身が誇りに思いながら、これからも教育実践を推進していきたいと考える。